女子美

No.154/2006

クレイアニメーション作家 湯崎夫沙子さん
NHK教育テレビ「プチプチ・アニメ　ナッチョとボム」より　©NHK・STUDIO YOSAKI

2P　OGインタビュー　湯崎 夫沙子さん
5P　ヒーリングアートプロジェクト他
6P　卒業（修了）制作展
9P　ライブラリートーク報告②　小塚昌彦氏
10P　卒業生の美術館③
11P　教養ゼミリポート①
12P　女子美アートミュージアム展覧会情報
13P　ホンダのデザイナーからスケッチテクニックを学ぶ
14P　新任専任・退職教員紹介、公募展受賞者紹介
15P　パリ滞在記　髙木 彩さん、女子美美術奨励賞
16P　産学協同プロジェクト、アジア学生アニメコラボレーション 他
17P　役職者紹介、モンキーパンチ氏講演会
18P　マデイラ賞受賞者紹介、シリーズ女子美探訪③

女子美術大学広報誌

Interview・OGインタビュー　クレイアニメーション作家 湯崎 夫沙子さん

イタリアで「クレイアニメーション界の巨匠」と呼ばれている人物をご存知でしょうか。NHK教育テレビのプチプチアニメで放映されている「ナッチョとポム」や「タルピー」、欧州で現在大人気の「ペオ」シリーズの作者の湯崎夫沙子さん、本学の卒業生です。イタリアに渡って40年以上クレイアニメーションを制作し続けている湯崎さんにお話を伺いました。

イタリアに行くまで

―女子美では図案科（現デザイン学科）で勉強されたんですよね。

湯崎：そうですね。デザイン全般の勉強をしていました。あの当時の授業内容はとにかく面白かったですよ。…物事を深く見つめ追求していけば何かが見つかる…という松川丞二先生の「美の追求」をする授業、河野鷹思先生のポスターの授業、テレビのテロップやタイトルデザインを制作する授業…。女子美での授業は、私にとってはデザインの授業というより、一流の先生にものすごくいろんなものを習う場であったと思います。授業外では私たちのグループで彫塑部を作りました。そのときの顧問が桑原巨守先生というすごく有名な先生でした。部活では遊びながら、大騒ぎ！？みたいなことやってましたけど（笑）でも、その彫塑部が私と粘土との出会いになったわけで。夏休みは実家（福岡県門司市）には帰らずに、夏中、彫塑をやっていて、その作品を二科展に出品したら賞を受賞しまして、芸大の淀井敏夫先生に作風がすごくいいと誉められたりもしました。

―彫塑に興味を持たれたのはどんな理由からなんでしょうか。

湯崎：そもそも、人間そのものは立体でしょ。人間っていうのは土から生まれて土に還るもの、一つの人生を送って土に還るものですよね。粘土も人間と同じように崩せば無になって土に還るわけで、その原点は、もともと私たちの中にあるものだと思うんですよね。授業で、「目の見えない人に彫刻をさせたら喉の中の声を出す部分から彫刻をしていった」という話を乗松巖先生がしてくださって、今でも覚えているんですけど表現というのは本当に内から出てくるものなんだなとつくづく思いました。それ以来、彫刻を制作するときには、内から出てくるものの力強さの重要性をいつも感じていました。

日本からイタリアへ

―イタリアに行くことになったきかっけは？

湯崎：同じクラスで親友の西川さん（現在㈱アトリエ ニキティキ代表）が兵庫県の公費留学試験を受けドイツへの留学が決まったので私にも「新聞にイタリアの国費留学生の募集が出てるから応募しなさいよ！」と勧めてくれたんです。それから試験日までは、フランシスコ会の神父さんのところにイタリア語を習いに行って、面接官の前で話すスピーチを録音してもらってそれを丸暗記したりしました。翌日の合格者の中に自分の名前をみつけたときには「これだけやったら死んでもいい」と思うほど嬉しかったですが、まだ生きてます（笑）。現地でははじめの頃イタリア語でものすごく苦労しましたけど、そんな時イタリア語を外国人に教えるサークル活動をしていた大学生のアニエーゼに出会ったんです。彼女が私の最初の先生です。（アニエーゼさんは大学を卒業後、中学校の教師になり、その後、湯崎さんの仕事のパートナーとして、現在もミラノの「スタジオ・ユサキ」の経営･運営を切り盛りしている）

―その後、ずっとイタリアに滞在することに決めた理由は。

湯崎：女子美を卒業した直後は図案科の助手として働いていたんです。助手を休職して留学をしたので、日本に戻るかとても悩みましたけど、イタリアに残ることに決めました。ちょっと味わいかけたヨーロッパから、まだ何も形になっていないのにこのまま「さようなら」「期限が来たので帰ります」っていう、そういう状況に満足できなくて、自分の実力が試したくなったわけです。この地でどれだけのことができるか自分の力でやってみたいという気持ちになりました。

デフォルメーションし続ける作品

―イタリアでのお仕事についてお聞かせください。

湯崎：偶然、テレビ関係の広告をやっているエージェンシーの人と会って、私の二科展に出した彫刻の写真を見せたらすごく面白がってくださったんです。私の彫刻作品の動きを説明したところ、興味をもってくださり、「これをアニメーションの中に出してみないか」と。その頃人形が動くだけのクレイアニメーションは既にありましたけど、私の作品のように粘土がデフォルメーションしていって、別の形になるというものはなかったので、そこを非常に気に入ってくださったんです。それでテレビ広告の仕事をするようになりました。フェルネット・ブランカ社のCMを発表したらその頃コンピューターでのデフォルメなどない時代だったため、大人気になって、イタリア中の国営テレビで放送されたんですね。それまでのアニメーション界の巨匠までもがデフォルメし続ける私のクレイアニメーションにびっくりしたわけです。

―制作する時、ストーリーや構成の部分から湯崎さんが手がけるんですか？

湯崎：ストーリー作りから構成までほとんどすべて自分でやります。ただ、今のテレビの仕事は、量が前より多いので、期日に間に合わせるのに大変です。1人では到底できないから、スタッフを育てながら、3台のコンピューターとテレビカメラを置き、同時進行で制作をしていきます。「ペオ」の旅シリーズのスイス編なんかはスイスの26の州の州ごとの独自の文化をペオが体験しながら紹介していくものなのですが、26州分のストーリーを作らなければならないので、アニエーゼにフランス語の資料の時は読んでもらい、全体を把握した後、構成や場面や動きを細かくストーリーボードに描いていきます。例えば、「ペオの

NHK教育TVで人気の「ナッチョとポム」

ミラノのスタジオでの制作風景

耳が背景の山になり、オレンジのペオの手が牛乳の桶になる…」とか3分の作品なら3分の流れを映像で頭の中で作り上げます。実際の制作は私のストーリーコンテに従って粘土で作った形をコマ撮りしていきます。基本的には自分で制作して撮影しますけど、いくつもの作品を同時進行させる時は、スタッフに指示をしながら作らせ、スタッフの制作したものを背景や細かい部分までチェックして、出来るだけ納得のいく作品に仕上げます。とにかく時間のかかる作業ですから時間との戦いです。1秒間の映像が24〜25コマで構成されているので、朝からやっても1日3〜4秒しか制作できないんです。スタッフが何時間もかけて作ったものでも表現すべき事が表現されていない時には私は「やり直し！」と言いますが、そうすると、怒ったり、時々涙をこぼしたりします。私は意味のない表現はあるべきではないと考えますからこだわるところは徹底的にこだわるので。進捗管理を担当しているアニエーゼの頭をいつも悩ませてはいますけど（笑）、でも一つのものを完成させる時、妥協したり、最後の仕上げまで手を抜かないというのは重要ですよね。

―湯崎さんのクレイアニメーションの主題になっているのは何でしょう。

湯崎：メタモルフォーゼ（変形）です。一つのものが別のものに変わること。私たち自身が変化し続けているからです。だってこの瞬間にも髪の毛が何万本も落ちているわけでしょ。みんな変形しているんですから。そのことを表現したい。だからあらゆる止まった形のものに生命を与えるものとしてアニメーションをつくっています。5分くらいで表現して、多くの人にわかりやすく伝えるためにストーリーをつくって「子ども向けアニメ」や「CM」として発表していっているわけです。他の人がやっているクレイアニメ―ションと違うところは「言葉（台詞）がない」ことですよね。3つの要素、色と形と動きで言いたいことを相手に伝えるということ、そこが一番根本になっているんです。私はエクスプレッション（表現）としてこの仕事をやっているので、ヨーロッパでは粘土アニメと言っても粘土アニメの詩人、「ポエムのアニメーター」だって言われています。

―「ナッチョとポム」という作品はどうやって誕生したのですか？

湯崎：「誕生する子ども」と「この世の中（宇宙）」との出会いなんです。なので宇宙人。タイトルの中に、「宇宙からやってきた二つのナッチョとポム」とありますよね。頭にグルグルを持っている宇宙人が、宇宙船から降りてくるんです。宇宙には日本では「天の川」って呼ぶ川がありますよね。これをイギリスやアメリカ、それにフランスやイタリアでは「ミルキーウェイ」って言うんです。なので、宇宙の中にミルクの箱だとかミルクをいっぱい置きました。そのミルクの川を通ってナッチョとポムという宇宙人がこの地球に降り立ち、そこで冒険をするという話で、発想のイメージは「赤ちゃんたち」なんです。お母さんのお腹の中＝宇宙、一つの宇宙から、初めてこの世の中に赤ちゃんが出てくる。エピソード各回いろいろな場所に降りてきて、その場所々で遊びながら体験して、楽しんだ後、お土産に一つだけ「モノ」（様々なもの＝地球上の産物）を貰って宇宙に帰るというお話なんです。

私が子どもっぽいから…

―先日、岡山での子どもたちとのワークショップでは子どもへの接し方が慣れていらっしゃるように感じましたが。

湯崎：それは私が子どもっぽいからだ！（笑）イタリアでは小学校に出向いて、ワークショップをやることもよくあります。もともと私は「子ども大好き！」っていう感じではないんですけど、私が子どもだから、子どもが警戒せずに近づいてくるんだと思います。ポカンと子どもが私を叩けば、私もポカンと叩いたり（笑）ワークショップでは「一緒にやろう！」という気持ちで、楽しもうとすることが、すごく大切だと思いますね。私は指示することは最小限にして、できるだけ子どもが手につかんでいる粘土から何をイメージして、何を作りたいかを助ける。とにかくあまり堅苦しくはやりません。どんどん作る子もいれば、作れない子もいるんです。人それぞれでいいんです。もしかしたらその作れない子が将来、大科学者になるかもしれないんだもん。だけど、手と手から作り出せるもの、粘土というのはコンピューターゲームのリモコンボタンじゃないんだということを肌でわかってほしい。子どもの時期に、そういう、押さえたら形が変わって、自分の思うようになったという経験があると、できるだけ面白いものをまた作ってみようって思うようになる。そういう子どもが出てきて、発想力というものが育っていけばいいと思うんですよね。

―岡山での講演会では「色と形と動きしかない作品で子どもたちの想像力を養い、親子のコミュニケーションの手助けをしたい」ともおっしゃっていましたが。

湯崎：そうですよ。アニメーションやマンガのように台詞があれば、考えなくても何でも簡単にわかってしまいますものね。台詞がなければ、子どもと母親の間で「○○ちゃん、ね、どう思う？」とコミュニケーションを広げるきっかけにも繋がるし、「これって、どういうことなのかな？」と、子どもたち自身が考える力を養うことにもなるんじゃないかと思います。ウォルト・ディズニーの「ファンタジア」という作品がありますよね。皆さん大好きだけど、私はあれを見たときにショックを受けたんです。

ヨーロッパで大人気の「ペオ」〜ペオギャラリー「ゴッホ編」〜

大音楽家の作った作品にあわせてディズニーキャラクターが踊る作品です。確かにあれも台詞がないですが、こわいのは子どもたちがこれを観たら、一瞬にしてこの曲のイメージはそのビデオの映像のイメージとして記憶に焼きついてしまうこと。大作曲家の名曲を聞くと三匹の子豚の踊るシーンを連想させてしまう。作品としては素晴らしいかもしれないけれども、それだけでは駄目だと思うんですよね。あの音楽にはまだほかのイメージもあるんだということをみんなに知ってほしいし、小さい子どもにはいろんなイメージをもってほしいわけです。

―そういう意味でも、湯崎さんの作品は想像力の泉ですよね。奇想天外、初めて見る世界があり、子どもたちへの刺激は相当なものだと思いますね。

女子美時代

―湯崎さんの在学中の女子美はどんな所でしたか？

湯崎：私たちの先輩は赤いキセルでたばこを吸ってたり、とにかく奇抜で先端をいってる感じだったし、凄い大学だったと思うけど、私たちは、ミーちゃんハーちゃんって感じでしたね。とにかく遊びましたね(笑)だけど、そういうことがすべて積み重なっていったようです。今思うと、授業を受けているその時は、「何も身についていない」と思っていても、実は、きちんと身についていたことがたくさんあるんです。しかも遊びながら、楽しみながら、悪戯しながら、この自由な雰囲気の中で勉強できたっていうのはすごく良かったし、「やりたいことは遊ぶ気持ちでとことんやる」という今の私のベースになっているんですよね。そういう意味で、女子美に入った時点から、人生の進む道が決められたっていうか。女子美が、私の両腕だとか髪の毛や足のつま先まで枝のように伸びて全身に入っているということですよね。女子美がなかったら、人生がもう、全然違いますよ。全然別のところで別のことをやっていたかも知れません。60歳以上になっても、今もこうして女子美の仲間との友人関係やこういった取材での母校との繋がりが続くということを非常に幸せに思います。今になって改めて「ああ、大学時代っていうのは大切だったんだなぁ」と思って、とても感謝してます。おそらく、今、女子美で学んでいる学生たちにはわからないかもしれませんけど、女性は卒業後、仕事や出産育児など様々な道を歩んでいきます。でも個々の人生を送りながら、仮に一時ブランクがあっても、この歳で「うわぁ、未だに、こんなに手を繋いでいられてるんだ」って感じる、この女子美の不思議なパワーには本当に驚かされます。

「0才から99才まで遊べるおもちゃ展」で展示された粘土作品(撮影で実際に使用したもの)

講演会「クレイアニメーションの魅力とテクニック」

後継者を育てたい

―今後のお仕事のこと、夢やこの先のビジョンなどをお聞かせください。

湯崎：早く私の考えを即座に理解して仕事をしてくれる後継者を育てたい。もっと対等に一つのものを作っていけるような人材が育っていってほしいのですが、まだなかなか難しい。結局、未だに全部自分で、ファシストみたいにやってしまっている（笑）。アニエーゼが「あなたの性格が強いから、スタッフはみんな遠慮してなかなか対等に意見が言えないのよ」と言ってます。でも私自身はそうでもないと思ってるんだけどなぁ。ただ、思ったことはボンボン言ってしまうから、みんなビックリしてしまうのかも知れませんね。難しいのは、私の作品には私なりのこだわりがある。かといって私のやり方にただひたすら付いてくると、スタッフは単なる一人の労働者になっちゃうわけで…。技術を教えるとともに、私のフィルムの中に、どこまで若い彼らの個性やアイデアを入れられるか、ということをいつも悩んでいます。独自性も生かしてあげたいし、みんなも若いから、自分のものを作ってみたいという気持ちも持っている。私としては、できれば将来そういう若い後継者と一つの作品を、ゆっくり一緒につくるような仕事ができたらいいなと思います。

ワークショップ「湯崎夫沙子のねんどでおはなし」

―後輩へのメッセージを。

湯崎：大学在学中は、やはり、いろんな経験をするということです。私の経験から言うと、たくさんいろんな経験をして、何でも一生懸命やることです。それを「ただ、面倒くさい…面倒くさい」と言うかどうかでかなり将来が違ってくると思います。自分で「これはやってみた方がいいんじゃないか」と思った時には、迷わず思う存分やってください。だけどやりたいことだけではダメで、よく考えて「嫌だけど、これはやるべきだ、やらねばならない」と思った時は、経験を積むという努力も大切だと思います。

（インタビュー・文：広報課　三ツ木知昭・林 亜紀子）

「0才から99才までのあそべる！おもちゃ展」

世界中から集められたおもちゃを展示し、実際に遊ぶことができる展覧会が開催されました。期間中、この展覧会の一環として、湯崎さんの作品の展示・上映、講演会、ワークショップ、サイン会など、様々なイベントが行われました。

会場：岡山市デジタルミュージアム
〔2006年2月17日～22日〕
主催：NPO法人0-99おかやま　おしえてネット、
岡山市デジタルミュージアム、山陽新聞社

パートナーのアニエーゼさんと

湯崎夫沙子（Yusaki Fusako）

1960年女子美術大学芸術学部美術学科図案科卒業。64年イタリア政府給費留学試験に合格しミラノへ留学。その後、数々のクレイアニメーション作品が脚光を浴び、現在も、ミラノを拠点にクレイアニメーション作家として活躍中。欧州と日本のテレビ局と多数仕事をする傍ら、数々の国際アニメーション・フェスティバルの審査員を務める。'85年迄のアニメ映画集は原美術館のコレクションとして収蔵されている。現在、NHK教育テレビでも湯崎さんの制作したクレイアニメーション作品「ナッチョとポム」が放映されており日本の子供達からも高い人気を博している。

Topics ●1 日赤医療センター ヒーリング・アートプロジェクト

●プロジェクトの進行過程

2005年6月、日本赤十字社医療センターからの依頼を受けて、同センター健康棟１階から７階の環境整備のため、通路壁面に設置するヒーリング･アート作品の制作･設置のプロジェクトが発足しました。本学ではこれを、サービス・ラーニングに位置づけし、全学的にボランティアによる制作参加者を募り、大学、短期大学部の各専攻、コースから112名の学生が参加してプロジェクトを進めました。

作品の内容は、医療空間の環境改善の一助になるという主旨をよく考え、全体計画を参加者全員で話し合い、共同制作を原則としました。また、事前に各階病棟の医療スタッフにそれぞれの階のテーマ、表現上の注意点、色彩などについてのアンケートを実施し、その結果を踏まえて各階のテーマを決め、原画制作を進めました。さらに完成した原画について医療スタッフと意見交換会を行い、原画を見ながら、各階の作品の改善点を検討しました。

本制作は、夏休み期間を使って行いました。作品の外形は円形、雲型など角をなくし、丸みをつけた木製パネルを使い、視覚的にやさしいものになるよう工夫しました。画材はアクリル絵具を使用して彩色し、総計65点の絵画作品を制作しました。

10月24日から26日までの3日間には同センター診療棟2階、講堂で「日本赤十字社医療センター癒しの絵画原画展」を開催し、B3のイラストボードにアクリル絵具彩色した原画を一堂に展示して、作品全体の雰囲気を感じていただきました。

●健康棟病室前通路壁面に作品設置

作品設置は2006年1月25日、健康棟検診センター前階段部の1階～2階に3点（テーマは『水・木』）、4階母親学級前の壁面に2点（テーマは『森の中の動物』）、5階産科病室前の壁面に24点（テーマは『植物と動物』）、6階産科病室前の壁面に19点（テーマは『季節―植物』）、そして7階内科・眼科病室前の壁面に17点（テーマは『風景』）総計65点を設置し、プロジェクトが完了しました。

（メディアアート学科教授　山野雅之）

医療スタッフとの原画検討会

制作風景

原画展（日赤医療センター講堂）

作品設置（病室前通路）

NEWS ●1 えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト

急速に広まってきた情報化社会の中で、私たちの生活環境は、激変してきています。私たちの考え方、感性、判断、知覚も、変化しています。一方では、長い歴史と社会状況の中で育ってきた伝統工芸の文化があります。各時代の芸術文化や技術を生かし、生活に密着しながら発展し現在に踏襲されてきました。しかし、この伝統工芸にも、新たな変化が必要になってきています。このような状況で、「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」は立上げられ3年目を迎えています。今年も学生たちは11人の伝統工芸者について制作を行いました。

このプロジェクトでは、情報化社会を敏感に感じ、どのように対応して新しいアイデアを提案するかが学生に課せられた課題です。

1月末、えどがわ区民ホールで行われた第3回作品発表会では試作品とプレゼンテーションボードが展示され、多くの来訪者の中、制作担当学生による説明が行われました。3年目を迎え、わが校の学生もマスコミの取材を受けるなど社会に認知され始めています。また、商品化され販売が始まろうとしている作品も出てきました。既に江戸川区の注目プロジェクトになってきています。来年度からも、更に内容を充実させ、より多くの学生に参加を呼びかけ、発展させていきたいと思っております。

（女子美術大学 研究所長　　飯村和道）

「しのぶキット」
小山梓（芸術学部 工芸学科1年）
子どもが総合的な学習の時間などで釣りしのぶに触れて、伝統工芸を知り、生命の不思議や、生育する難しさや面白さを実感するための子ども向け学習キット

「風揺れ風鈴」
川原可奈子（芸術学部 デザイン学科3年）
今まで風鈴の内側に隠れていた振り管を外に出してカタチを与えました。風鈴の持つ涼やかで優しい音色を生かしつつ、その中で何か新しい、現代の人達にも手に取ってもらえるような風鈴は出来ないかと思い"風揺れ風鈴"を提案しました。

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

2005年度 卒業(修了)制作展 〈杉並キャンパス〉

短期大学部

●平成17年度　卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞　受賞者（短期大学部）

〔卒業制作賞〕

造形学科 美術コース
（絵画）赤城　早苗
海東　祐子
西田　知代
（彫塑）野口　佳枝

造形学科 デザインコース
・情報メディア系
楠田　貴子
髙橋　悠
・空間インターフェイス系
花木　尚己
・クラフトデザイン系
（陶芸メタル）髙野　あゆみ
（テキスタイル）森口　麻紀子
（刺繍）青谷　徳子

〔修了作品賞〕

別科 現代造形専修
山下　由貴

〔優秀作品賞〕

造形学科 美術コース
（絵画）岩田　優美
久保田　夏海
櫻井　英里香
（彫塑）齊藤　あか音

造形学科 デザインコース
・情報メディア系
小林　沙代
近藤　好恵
多々良　依里
・空間インターフェイス系
阿部　恵未子
阿部　有希
・クラフトデザイン系
（テキスタイル）鈴木　八代衣

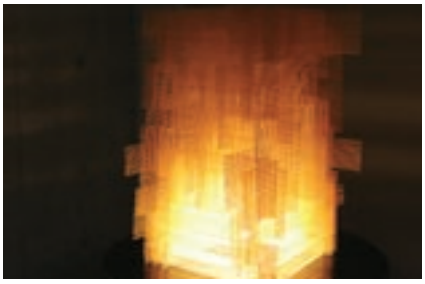
専攻科 造形専攻
・美術コース
小松　美羽
・デザインコース
會田　晃子
・工芸デザインコース
清水　亜瞳
野本　麻由美
斎藤　美鈴

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

〈相模原キャンパス〉

芸術学部・大学院



●平成17年度　卒業制作賞・卒業論文賞・優秀作品賞・優秀論文賞　受賞者（芸術学部）

〔卒業制作賞〕

絵画学科 洋画専攻	垣内　真理
	田中　紗樹
	安江　陽子
絵画学科 日本画専攻	川村　千波
工芸学科	手塚　えりか
立体アート学科	佐藤　翔子
デザイン学科	五十嵐　明奈
	木本　カオリ
	谷川　菜穂
	夏目　麻衣
メディアアート学科	越後谷みゆき
	高橋　美帆
	広瀬　あきこ
ファッション造形学科	井上　織衣

〔優秀論文賞〕

芸術学科	眞子　みほ

〔優秀作品賞〕

絵画学科 洋画専攻	大塩　博子
	小暮　晴香
	柳瀬　あかね
	鈴木　奈々
絵画学科 日本画専攻	大八木　咲和
	高橋　まり子
工芸学科	青山　絵里子
	加藤　美佐子
立体アート学科	大野　綾子
	堀井　寿乃
デザイン学科	泉　千陽
	加藤　暁子
	高橋　香菜子
	長崎　笑己
	伴野　綾香
	藤田　晃子
	小嶋　希衣子
メディアアート学科	佐藤　華恵
	櫻井　彩
	椎名　舞子
	鈴木　恵
ファッション造形学科	木田　景子
	庄子　里子

〔卒業論文賞〕

芸術学科	小笠原　綾子
	大石　未央子

その他の卒業制作展

■大学院

・美術研究科　修士課程　美術専攻　洋画領域
「女子美大学院洋画2年学外展」
（銀座・ギャラリー青羅）第一期：2.5～11
第二期：2.12～18

・美術研究科　修士課程　美術専攻　日本画領域
「女子美術大学大学院修士課程日本画修了制作展」
（文京シビックセンター　ギャラリーシビック）
2.22～26

・美術研究科　修士課程　美術専攻　染織領域
「女子美術大学大学院　染織領域　修了制作展」
（元麻布ギャラリー）　2.15～20

■芸術学部

・絵画学科　洋画専攻、絵画学科　日本画専攻
立体アート学科
「東京五美術大学連合卒業制作展」
（東京都美術館）　2.21～26

・絵画学科　洋画専攻　版画コース
「女子美術大学版画コース卒業制作展」
（すどう美術館）　3.28～4.1

・絵画学科　日本画専攻
「有志学外卒業制作展　―女子美術大学日本画専攻―」
（東京都芸術劇場　5階展示ギャラリー）　3.2～5

・工芸学科　＜陶・ガラスコース＞
（スパイラルガーデン　Spiral）　2.15～19

・工芸学科　＜織コース＞
（AXIS　(アクシス)）　2.16～19

・工芸学科　＜染コース＞
（Quest hall　(クエストホール)）2.17～19

・立体アート学科　＜紙・繊維コース＞
「7works」
（東京都芸術劇場　展示室1）　3.26～31

・デザイン学科　＜PDコース＞
（GALLERY LE DECO　(ギャラリールデコ)）
3.28～4.2

・デザイン学科　＜EDコース＞
「al dentity　―空環展―」
（GALLERY LE DECO　(ギャラリールデコ)）
3.21～26

・デザイン学科　＜VCDコース＞
「84人展」
（ラフォーレ原宿）　3.18～20

・メディアアート学科
「XXpress」
（横浜赤レンガ倉庫　1号館2階）　2.28～3.2

■短期大学部

・デザインコース　クラフトデザイン系
テキスタイルデザイン　2年生・専攻科
「テキスタイルデザイン卒業制作学外展」
（銀座アートホール）　2.13～19

・デザインコース　クラフトデザイン系
テキスタイルデザイン　研究生
「テキスタイルデザイン卒業制作学外展」
（ワコール銀座アートスペース）　2.13～18

・デザインコース　クラフトデザイン系
陶芸・メタルデザイン
「陶芸・工芸・漆芸　展」
（銀座・ギャラリー青羅）　1.22～28

平成17年度　加藤成之記念賞

〈大学院〉
美術研究科 修士課程 美術専攻 日本画領域　三須　広絵
〈芸術学部〉
絵画学科 洋画専攻　田中　紗樹
絵画学科 日本画専攻　牛嶋　直子
工芸学科　杉本　浩美
立体アート学科　大石　泉
デザイン学科　金子　奈保子
メディアアート学科　林　奈緒美
ファッション造形学科　小山　紗代
芸術学科　伊東　摩衣子
〈短期大学部〉
造形学科　青谷　徳子
専攻科　久保　絵里
別科　大和田　弥誉

平成17年度　福沢一郎賞

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域
小野　沙織
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域
阿部　久仁子

平成17年度　大久保婦久子賞

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域
安藤　咲
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 陶造形領域
小山　暁子

平成17年度　女子美美術館収蔵作品賞

卒業（修了）制作で優秀な作品を女子美アートミュージアムの所蔵作品とします。

〈芸術学部〉
絵画学科　洋画専攻　栗原　那津子
絵画学科　日本画専攻　坂本　麻紀
工芸学科　矢羽野　智子
立体アート学科　澤村　真純
デザイン学科　金子　奈保子
メディアアート学科　高橋　絵美
ファッション造形学科　井上　織衣
〈大学院〉
美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域
堀込　幸枝

Series ライブラリートーク報告②

書体設計家　小塚昌彦氏

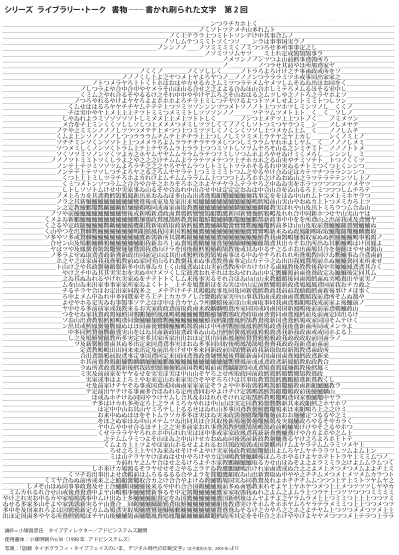
大学院客員教授の森啓先生の企画による書体設計家の先生方を迎えての講演会の報告、第2回目の今回は、小塚昌彦先生の講演です。小塚先生は毎日新聞の全書体の制作開発をされ、モリサワ株式会社のタイプデザインディレクターとして「新ゴシック」他、主要書体の制作開発のディレクションに関り、またアドビシステムズ社の日本語タイポグラフィ・ディレクターを務め、アドビオリジナル書体「小塚明朝」「小塚ゴシック」を制作開発した方です。日本で書体に名前が冠されている設計者は2人しかいませんが、そのうちの1人が小塚先生です。

私がこの世界に入ったのは昭和24年、毎日新聞社が最初です。当時は紙の上に文字をデザインし、それを基本に機械彫刻機で金属に文字を刻んでいくという仕組みになっていました。まず約5センチ平方ぐらいの紙の上に文字のデッサンをして、それをトレーシングペーパーに写しとって烏口で直線を引き、カーブは細い面相筆で墨で書いていく。当時はいいカーブ定規がなかったので、直線以外では定規は使いませんでした。今、毎日新聞で使われている文字の原字はすべてフリーハンドで書いてあります。そういう形でスタッフ5人ぐらいで、私がチーフになりグループで活字の原字をつくっていました。毎日新聞社は当時、活字をつくる現場を公開しており、見学者が来るとまず「活字のもとっていうのは、手で書くんですね」と驚くんです。それで逆にこっちが驚いたことが何度もありました。見学された方は必ずといっていいほど、活字はもとを人間が手で書いていたとは思っていなかったようです。それから必ずある質問は、「これは、何をお手本にして書いているんですか？」というものです。それもまた、私にとっては非常にショックだったわけですね。実は、お手本なんかはなかったんです。あるときには、東京芸大の学生さんが、グラフィックの先生から文字の勉強のために新聞の文字を勉強するように言われたといって面会に来たこともありました。私はそのときに、自分が毎日一生懸命に書いてデザインをしているけれども、実はそれがこの学生にとっての「お手本」をつくっていることになるのだということに愕然としましたね。ここでようやく文字とはいったい何だろうということを考える下地が出てきました。

そこで、書体デザインを日常なりわいとしながらですね、いろんな意味で文字とは何かということを考えているときに、一番最初に疑問に思ったのは、文字はどうやってできたんだろうということです。それからその文字がどのように活字書体、今でいうタイプフェイスになっていくのか。そんなときにアドリアン·フルディガーの提言する「文字というのは人間の右手の軌跡」だという話に出合ったのです。

例えば漢字のルーツとしては、殷の時代に「甲骨文字」のようないわゆる象形文字がつくられています。要するに洋の東西を問わず、文字というのは、物に刻むとか、彫るとか、そういう動作で創られてきたと考えます。それがやがて、筆と紙というものができて書くという行為が生まれます。彫るとか刻むとかいうことと、書くということの違いですが、彫るというのは、左右の手どちらでも、両手でも、彫れるわけです。恐らく、彫刻なんかは両手で彫る。だけど、書くという動作は両手で書く人はいない。私の知る限りでは、文字というものは右手で書く。今は左で書く人もいますが。空中に「一」という一本の線を書こうとすると左から右へ書きますね。もう一つ例をあげると、魚の絵を人差し指で空中に描いてみてください。ほとんどの方が左向きに描きます。それはなぜだろうと考えてみると、人間の造形心理として、右手で書くものは、右手の造形感覚でつくられているということです。これは人間の統計と深層心理から出てきたものです。世界の文字体系を見ますと左から右に書くというのがほとんどです。アラビックを除いてラテン系は確実にそうですね。カンボジアやラオス、タイなどの文字も左から右です。ただ、日本語は縦に右から左に書いていくのでそういう深層心理の問題が矛盾するかというと、そういうことではなく、例えば漢字の『木』を書いても横線は左から右に書きます。また左のハライはそのまま払いますが右はいっぺん押さえてから払います。これは欧文であろうと漢字であろうと右手の造形感覚ということにおいて同じであると思います。また、人は右にウエイトを置いて文字をつくっています。ポスターなんかでよく見受けられますけれども、書体の重心は約3%から4%右側に想定されていてちょうど、上下左右が安定するように視覚矯正をしています。これを幾何学的な中心にもってくると非常に頭でっかちに見える。見た目で左右が同じ太さに見えても右を必ず太くつくります。

一般大衆が手に取って見る文字というのはコミュニケーションの手段として非常に大切です。人間が右手で書いた軌跡がタイプフェイスに定型化するという過程があるわけですが、人間が書いたものを基に、そのストロークをもっと自由にコンピュータでつくったのがアドビでの仕事になります。毎日新聞、モリサワ、アドビといろんな所でいろんな知識を得ながら現代に至るわけですけれども、当然テクノロジーというのはどんどん進みます。書体というものは常に同じように見えながら、実はその度に基本的には改良を重ねていってより良いものへと挑戦しているのです。



ポスター作成:佐賀一郎(大学院美術研究科 博士後期課程 美術専攻 造形表現領域1年)

リュウミン M-KL　永 の

氏がモリサワ㈱で始めにした仕事はリュウミンの改良とファミリーの展開だった。

新ゴ L　永 の

新ゴの開発では全ての文字を形に基づいて分類。それに沿ってグループワークによる能率的な書体設計法を確立。

小塚明朝 M　永 の

モリサワ時代に培ったグループワークでの設計法を採用し、人間の右手が書く自然なフォルムをアドビの新しい技術で実現。小塚明朝·小塚ゴシックは氏の最終的な仕事といえる。

Series • シリーズ　卒業生の美術館③

深沢紅子 野の花美術館

「『紅子さんの絵と話をしてください』といつも来場者の方に言っています。」と話すのは深沢紅子野の花美術館の館長を務める佐藤晴久さん。「紅子さんは野の花を描くときにはいつも『描かせてくださいね』とお願いしていました。紅子さんの絵を見れば草原の風の音や虫の音が聞こえるはずです。絵を見て、陽の光や風を感じたり、花の香を嗅いだり、木の実を味わってください。」

盛岡市中津川の河畔に本学卒業生で女性洋画家の草分けである深沢紅子さん（旧姓四戸）の絵画、主に野の花の水彩画を集めた深沢紅子野の花美術館があります。中津川は盛岡のセーヌ川と呼ばれる川。春から初夏には川岸一面を紅子さんが愛でた忘れな草が咲き乱れ、夏には鮎が泳ぐ。秋にはサケが産卵し、冬には白鳥が川面を賑わせる。盛岡生まれの紅子さんの原風景です。

1996年に開館したこの美術館は1991年から市民の間で起こった「レンガ運動」（レンガ一枚を3000円で販売し、売上金を建設費に充てる）に支えられて実現しましたが、それ以前から「深沢紅子の絵を盛岡に迎える会」も立ち上げられており、いかに多くの人が切望した美術館であったかがわかります。展示は、油彩作品15点と紅子さんのライフワークである野の花の水彩作品200点をテーマを決めて季節ごとに展示替えするほか、個人や法人が所蔵している作品を借用して展示することもあります。油彩作品の数が少ないのは、1979年にもらい火によって紅子さんの自宅アトリエが全焼し、惜しくもそれまでに描きためた作品のほとんどを焼失したためです。

洋服屋を営む進歩的な父親に育てられた紅子さんは1919年、高等女学校の卒業とともに女子美に入学。日本画科に入りますが、2年後に油絵科に転科し岡田三郎助先生に師事します。三岸節子さんや森田元子さんもクラスメートでした。卒業後は同郷の画家、深沢省三氏と結婚し、5人の子をもうけますが、その後も画業の他に美術教育に奔走し、生涯仕事を続けられ、一水会や女流画家協会の創立にも参画しています。終戦後に盛岡で開設した子どもの日曜絵画教室や、舟越保武らとともにおこなった岩手美術研究所の開設・指導は、岩手の芸術界に力を与え、岩手県立美術工芸学校、盛岡短期大学美術工芸科を経て、岩手大学特設美術科設置の原動力にもなりました。

当時5人の子どもを育てながら女性が画業を続け、さらに多くの美術教育機関で指導にあたることはどれほどの困難をともなったか、想像に難くありません。「非常に苦労されたはずです。紅子さんはとても意志が強く、でもそれを外にはまったく出さない人。これは盛岡人の気質そのものと言えますね（笑）」と佐藤館長。アトリエが全焼して油彩作品のほとんどを焼失したときにも、「下手な絵は焼いてしまいましょ、と神様がお考えになったんでしょ、また描けばいいわ。」とおっしゃったそうです。

技巧を凝らすのではなくありのままを描く紅子さんの野の花は、繊細でありながら野に生きる「強さ」が表現されており、それはそのまま紅子さんの生き方を見ているようです。ぜひ今も変わらぬ紅子さんの原風景の中に佇む美術館で、野の花への紅子さんの温かい眼差しに触れてみてください。

（広報課　林 亜紀子）

「スカーフの女」1941年

<2006年度春の展示スケジュール>

「賢治童話に咲く野の花」
—3月25日㈯～5月11日㈭

「一水会選抜展」
—5月13日㈯～6月1日㈭

<お知らせ>

全国公募 第3回「花を描く展」
出品受付期間：9月14日㈭～10月12日㈭
会　　期：11月22日㈫～12月1日㈮

○交通案内

ＪＲ盛岡駅バスターミナルからバスセンター行「県庁・市役所」下車徒歩3分／ＪＲ盛岡駅からタクシー10分
http://www11.plala.or.jp/Nonohana/

やまぶき

がくあじさい

びなんかつら

さざんか

Topics ・2 シリーズ　教養ゼミリポート① 杉田 敦ゼミ

女子美の特色ある授業のひとつでもある「教養ゼミ」。基礎教養科目担当の教員が自由にテーマを設定しておこなうゼミ形式の授業です。シリーズでご紹介する第一回目は2005年度の杉田敦先生のゼミです。

グループ展をおこなった会場

昨年11月25日から30日まで、東神奈川駅近くのギャラリー「studio BIG ART」で「彼女は道に迷った ～思考の痕跡～」というグループ展が開かれた。この展覧会をゼミのみんなでゼロから企画し運営するというのが杉田ゼミの約1年間の授業だった。

当初杉田先生はこの授業で、作家、企画者、学芸員、鑑賞者、批評家など、アートに関わる様々な立場のうち、普段あまり機会のない「批評家」の立場を体験してもらうことを考えていたという。ところが学生の多くは個展やグループ展を経験したこともなく、「企画者」や「学芸員」の立場を経験したこともなかった。それでまずはグループ展をやってみることになったのだ。

学生は作品制作と展示会の企画・運営を同時に進行させる。運営面では、「コンセプト班」、「会場班」、「運営班」、「広報班」、そして日々の進行を記録し、最後に全過程をポートフォリオにまとめる「記録班」に役割を分担して進めた。

コンセプト決定にあたって先生が「ここだけは外さないように」と重視したのは、内々に向けての発表ではなく、外に向かって必ず発言をするという点。「造作のレベルでは低くても、若者だからできる発言が必ずある。」と話す杉田先生。最終的に、アートを学びつつ悩み戸惑う学生たちの「思考の痕跡」を展示することになった。

会場費は全員で分担するほか、アートイベントで手作りの缶バッチや、チュッパチャップスなどを販売し、自分たちのやろうとしていることをアピールしながら、あえて汗を流してお金を作る努力をしたという。「飛び込みで銀座の画廊などにも聞きに行かせました。そうすると1週間で35万円という金額や、『2年後ならば空いていますよ』と言う答えが返ってきて、どのくらいお金も準備期間も必要なものなのかを身をもって知るわけです。」

展覧会当日。作品はグループ制作作品やライブペインティング、毎日展示場所が変わるインスタレーション「移動する絵画」などの他、会場の一角では「裏エンナーレ」と称して日頃学生が制作している作品が展示された。

杉田先生にこの授業の意義を伺った。

「現実の世界でのアーティストというのは作品制作のほかに自分の時間の半分くらいを費やしてポートフォリオを作って見せに行く、展示会を企画する、場所を探しに行く、広報を打つ、などの仕事をやっているわけです。自分たちを外の世界に見せていくために必要な仕事です。」

学生たちは実技授業の課題とこの展覧会の準備に取り組む時間とのバランスをとるのに苦労していたという。

「どちらが大切かという疑問にぶつかるのです。課題の制作はもちろん大切。でも同時に、学外で通用する価値基準を見つけることも重要で、展覧会を体験することはいい機会になります。学生によって意識レベルは違いましたが、全員の意識が多少は変わったと思います。」

また、貴重なメッセージを頂戴した。

「自分の将来がどうなっていくかをリアルに考えてほしいですね。たとえば学生のうちに2回くらい個展をやる。卒業後にもやってみる。それが誰かの目に留るかもしれないし、なんらかの助成をもらうことにつながって留学することも夢じゃない。そういうプランをリアルに自分のこととして考えていかないともったいないです。」

（インタビュー・文：広報課　林 亜紀子）

〈展示作品の一部〉

「教師のための教科書」――「美術を教える人って、本当に教えるものをもっているの？」という素朴な疑問が学生から湧き起こったという。それに対して「『教育者はこうあってほしい』と言えるのは今現在教わっている当事者である自分たちではないか」――そんな考えから制作された教師向けの教科書。

教師のための教科書「せんせいとわたし」

「私たちについて」――自分自身の外面を使って自分を表現する試みのために、ゼミメンバー全員が一人ずつ自分史を語るところを撮影し、映像にしたもの。

「女子美リカちゃん写真」――展覧会にあたって、「アートが社会に問題提起していけるというアートの社会性も何らかの形で示してほしい」という要求を出したという杉田先生。学生たちは「社会で起きていることを何となくは知りつつも、曖昧な知識のままに的外れなことをしている」自分たちを、女子美の付属高校の制服を着た「女子美リカちゃん」に象徴させたものを制作した。「今日では社会のことに目をつむって、キャンパスに向かっているだけでは意味のある表現を生み出すことはできません。そうした状況下、自分たちの周囲に社会のいろいろな問題があること、そしてときには、本人が意図せずにそうした事態に関わってしまっているということを何らかの方法で示すことができないか、というのが作品の趣旨です。」と杉田先生。

「危険を教える玩具のためのエスキース」――地雷の埋まる地域に住む子どもたちのために、地雷の危険を知ることができる玩具を提案しようとした学生も。設計図として完成させて提案するというところまでは至らなかったが試案としてのエスキースが展示された。

「円卓会議」――展覧会の運営準備も一筋縄ではいかない部分もあった。そこでそんな議論も含めて会場でオープンな討議ができるよう企画されたのが「円卓会議」。7つの椅子を丸く並べ、期間中毎日19時から30分間、椅子に腰掛けて討議する。テーマは前日の最後の討議テーマがその日の討議テーマになる。ゲストも参加自由だ。さらに学生たちはこの円卓会議での討議内容を録音してウェブサイト上でインターネットラジオとして公開した。

ゲストも自由に参加できる「円卓会議」

JAM・女子美アートミュージアム展覧会情報

展覧会開催報告

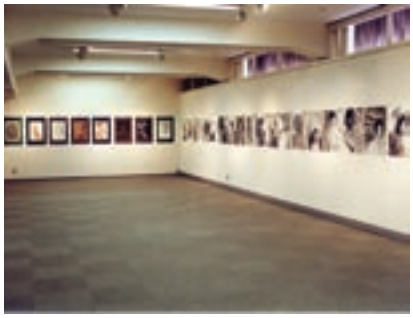
〈JAM〉「スモール&ビューティフル：スイス・デザインの現在」

本展覧会は、スイスの現代デザインを広く紹介するためにスイスで企画制作され、東京展を皮切りに日本各地を巡回するものです。女子美アートミュージアムは2番目の開催でした。展示は、作品の入った輸送用木製クレートを開けばそのまま展示ケースとなるというユニークな構成で、スイスの合理的な考え方に感心させられます。展示内容は、アートワーク、装飾品、工業デザイン、グラフィック·デザイン、ブック·デザインなど、既に確立されたスイス・デザインの分野に加えて、今日の若手デザイナーによる新作ファッション、テキスタイル、家具などが含まれ、生活に密着したデザインのあり方を具体的に提示いたしました。スウォッチの時計、ビクトリノックスのナイフ、ネフの玩具、フライターグのバッグなど、日本人に親しみのあるグッズを始め、400点余りの展示品が美術館の中に散りばめられました。それに加え、女子美アートミュージアム独自の企画として、スイスで制作されたポスターで壁面を飾り、スイスの国がより立体的に感じられる空間構成を行いました。

小さいながらも美しい国スイスは、長い時間をかけて、平地の少ない険しい国土で豊かに暮らすことを追求してきました。今やスイスは国土のいたるところで雄大な風景の中にシャープなモダンデザインが展開する、世界でも稀な国となっています。「小さく豊かに生きる知恵」を実践するスイスの現代デザインは、訪れた方々に感銘と共感を与えることができたといえます。

（2月7日〜2月20日）

＜ガレリア ニケ＞「第8回『デッサンコンクール』展」



女子美術大学芸術学部・短期大学部の全学生および、付属高校の生徒を対象としてデッサンと素描作品のコンクールと展覧会を開催いたしました。今回の応募者は96名、応募作品数は135点でした。審査の結果、最優秀賞に伊東洋子さん（短期大学部造形学科美術コース研究生）、中井美帆さん（付属高校3年）の2名、佳作賞に岡田蘭子さん（芸術学部立体アート学科1年）、小辻奈央さん（芸術学部絵画学科洋画専攻1年）、門間洋子さん（芸術学部絵画学科日本画専攻1年）の3名、計6名の方々が受賞の栄誉に耀きました。

（12月5日〜12月16日）

展覧会案内

＜JAM＞

「KIMONO　小袖にみる華・デザインの世界」展

平成18年度の最初の展覧会は、近世の小袖を取り上げます。小袖とは現在の着物の祖型となるもので、この形は室町末期から桃山時代にかけて完成しました。その後、江戸時代には様々な染織技法が用いられ、小袖という限られた形態の中に、多彩で華やかなデザインの世界が展開されました。本展は、女子美術大学美術館収蔵の小袖41領と裂6点を、7つのテーマ「友禅の華」「詩歌の華」「吉祥の華」「絞縫の華」「雅の華」「風景の華」「桃山縫箔の華」に添って展示します。近世の小袖のデザインと表現技法に焦点をあて、小袖にみる華の模様をもとに、刺繍・染織技法・意匠の変遷をたどりながら、そこに込められた人々の美意識や願い、遊び心を読みとっていただこうという企画です。当時の優れたデザイン力と、完成度の高い工芸技術で制作された小袖の美を、鑑賞していただけることと思います。

（4月28日〜6月11日）

染分地熨斗文様小袖

桜樹に文字文様

2006年度スケジュール

「女子美術大学美術館収蔵作品展」（仮称）
—7月5日〜10月16日（8月休館）

「さがみ風っ子展」（相模原市教育委員会主催）
—10月26日〜10月30日

「NEW WAVE part.4」
—11月10日〜12月17日

「退職教員作品展」（仮称）
—2007年1月12日〜2月5日

「女子美術大学大学院　修了制作作品展」
—3月3日〜3月21日

（美術資料センター　長谷川なほみ）

Topics ③ ホンダのデザイナーからスケッチテクニックを学ぶ

1月17日～20日の4日間にわたり、株式会社本田技術研究所（以下ホンダ）の主任デザイナーによる、「アイデア展開のためのスケッチテクニック講座」がおこなわれました。デザイン学科のプロダクトデザイン専攻の学生を対象に、短時間にアイデアスケッチを描けるようになることを目標として、マーカーを使ったレンダリング（デザイナーの意図する形、素材、色、大きさ、構造などを他者に正確に伝えるための絵）の技術を学ぶ自由参加の講習です。

講習は4日間、10時から17時までみっちり

講師はホンダの朝霞研究所デザインブロックのデザイナー、齋藤和彦さんと山﨑隆之さん。テーマは「身近なモビリティ（移動用機器）」で、車輪を使った身近な乗り物のデザインを考えるものだ。

１日目はマーカーやパステルなどの画材に慣れるために、ステップバイステップでレンダリングを仕上げていく丁寧な指導があり、２日目は各自がコンセプトを考えながらアイデアをスケッチで表現していく作業。スクーターの構造を理解するために、今回特別にホンダより教室に持ってきていただいた実車の外装パーツをはずしながら構造の説明をしていただく。また学生たちと一緒にコンセプトを考えながらその場でスケッチを描き上げてくださるなど、アイデアのまとめ方やスピード感のあるスケッチも見せていただいた。３・４日目も講師からアドバイスを受けつつアイデアスケッチを展開し、４日目の最後には全員がプレゼンテーションをして、講評を受けた。

この講座の企画・アレンジをしてくださったのは本学産業デザイン科（現デザイン学科）の卒業生で、現在はデザイン学科プロダクトデザインの非常勤講師の大橋由三子先生だ。通常、ホンダが全国のデザインや美術系の学校に出向いて実施している講習では「同世代をターゲットとしたスクーターのデザイン」をテーマとし、レンダリングの技術の習得を目指すもの。それを今回の講習では「自分以外の人のために想像力を働かせてアイデアを出すというデザインの基本と、そのアイデアを展開する力をつけさせたい」という考えから大橋先生が内容をアレンジし、レンダリングよりもアイデアスケッチに重点を置いたものになった。ターゲットとする世代も限定せず、テーマはより広い「身近なモビリティ」とし、条件もガソリン車から電動車やハイブリッド車まで広げている。

大橋先生は数々のデザインコンペでの受賞歴をもつ現役のプロダクト・デザイナー。「頭の中に浮かび上がったアイデアをいかに短時間にスケッチし、２次元に定着させるか。これはデザイナーにとって最も大切なテクニックです。デザインの現場で働いている方から若いデザイナーに足りないのはその場でアイデアを伝えるラフスケッチの力と聞きます。」企業からも即戦力が求められる時代、学生たちには在学中に少しでもデザインの基礎的な技術をスキルアップできるようこの講習を企画してくださった。「どう描くか悩んでいると手が止まってしまう。アイデアスケッチでは手を動かし続けることが大切。緊張せずに『私、天才かも』と思いながら描かないと（笑）。描いているうちにアイデアは湧き出てくるものです。まずは下手でもいいので細かいところにこだわらずにとにかく描いてみること。」

４日間の講習を終えて学生たちは、「現役デザイナーから厳しいコメントをもらったおかげで企業のデザイン室のイメージが湧いてきた。」「講習を受ける前はマーカーで色を塗るのに抵抗があったけれど、何度か重ねづけするだけでカバーできることなど、ためになることがたくさんあった。」「レンダリングでは、勢い良く描くプロの技を見せていただいて感動！」などと大満足。大橋先生からは、「初日はおっかなびっくりだった学生たちですが、最終日にはデザインを考える時間を含めても2時間ほどで1案描き上げられるまでになりました。プロだと20分か30分の仕事ですが、４日間でよくここまで上達できたなあと思います。」とのコメントが。さらにこれからデザイナーになる人に「女子美の学生はセンスがあって、視点も面白い。就職する段階でデザインの技術だけでなく、企画立案からそれをどう流通させればマーケットに浸透させられるのかというところまで提案できる力とそれを言葉によってプレゼンテーションする力も伸ばしてもらいたいですね。」と、期待を込めたメッセージもいただいた。　（広報課　林 亜紀子）

ホンダ･山﨑さんのプロならではのアイデアスケッチのスピードに学生は唖然

実車の外装パーツを外しながら学ぶ

丁寧に個別にアドバイスしてくださったホンダ･齋藤さん

本田技術研究所朝霞研究所
デザインブロック　齋藤和彦さんより

乗り物のデザインというと、興味のある人とない人では構造などの理解度が違うため、自分にはよくわからないと引いてしまう人が多いのですが今回のセミナーでは当初考えていた参加予想数を上回る学生さんに集まっていただいてとても驚きました。

仕事柄、年間を通して全国の美術・デザイン系の学校で同様のセミナーを行うことがあるのですがそんな他校と比較してみると、まず学生さんがとても元気だ！ということがいえると思います。

今回のテーマは「身近なモビリティ」ということで乗り物のデザインですから基本となる「乗って楽しい」ということが欠かせません。仕事で使うようなものでも、仕事が楽しく感じるようなツールを創造するのはデザイナーの役目ですから“楽しい”ということがとっても大事です。デザインすることを楽しみ、みんなと作業することを楽しみ、疑問に思うことを質問しながらも会話を楽しむ。そんな雰囲気がありました。出来上がったスケッチも自由な発想が感じられるものが多く、ユニークな形やアイデアがプロとしてデザインをしている講師の我々にも刺激になるような楽しく新鮮なものがあり、とても面白かったといえます。プロダクトデザインは常に相手（ユーザー）がいて、その期待にこたえるもしくは期待以上のものを創り出す仕事ですが、そのためにはいろいろなことを自分のなかに蓄えておく必要があります。女子美での学生生活でいろいろなことを見聞きし、知識や経験を蓄えて新しいものを生み出す力にしてほしいと思います。今回参加していただいた学生さんのほとんどが、車やバイクとはちがうジャンルのデザイナーを目指すのだと思いますが、このセミナーでやったことはきっとこれからのデザイ

2006年度新任専任教員紹介

廣田　尚子
Hirota Naoko

芸術学部　デザイン学科　助教授

東京生まれ。1990 東京芸術大学卒業 ,GK プランニング＆デザインを経て1996ヒロタデザインスタジオ設立。1997 ミラノサローネ出展。ミラノにて個展。1998～2000 Premiere Class ParisにてNAOCAコレクション発表。2001 Tokyo Designers Block 出展。賞歴：国際バッグデザイン豊岡　金賞 (1994)。The I.D. Annual Design Review　入選 (USA) (1998)。デザインフォーラム 金賞 (1999)。グッドデザイン賞 (2000)。JIDA Design Museum Selection(2004)。

デザインは人と人、人とモノとのコミュニケーションを創ることです。

社会の変化・環境・人の感覚などの情報という無形の要素から人とモノの新しい関係性を創り、有形のモノとしてデザインすることでそれを使う人のコミュニケーションを可能にします。

授業を通して情報を分析する思考と、伝えるための造形表現を相互に追求します。デザインの理解を深めていくことで、私たちが生きている現代生活を多様な視点から丁寧に見つめていきましょう。

退職教員紹介

近江　源太郎
Ohmi Gentaro

芸術学部　芸術学科　教授

これまでの人生の半ば近くを、女子美で過ごしました。平穏なようでも、多少の山や谷はあったかな、と思っています。もともと美術には粗野な人間ですが、美術の隣りあたりで暮らせたことは幸せでした。また、小さい集団ではありましたが、さまざまな個性を垣間見、そのうちで尊敬できる教職員や学生の方々、あたたかく支えて下さった方々に巡り会えたことも、幸せでした。にもかかわらず、私の不行届きから、ご迷惑をおかけしました方々にはお詫び申します。今後、女子美から、人間の精神を研ぎ澄まし豊かにするような作品や思想が、発信されることを期待しています。

NEWS 2 公募展受賞者紹介

第1回 和紙のふるさと飯山「和紙のしごと大賞」コンペティション

○奨励賞　上岡ひとみ（大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻1年）
○造形の部 入選　北村有希子（芸術学部 立体アート学科4年）
○造形の部 入選　大山　萌（芸術学部 立体アート学科3年）

第9回「エネルギー賞」展

○入選
芸術学部 芸術学科1年
伊東　沙織、大倉　三和、大谷　昌子、小田　悠子、佐藤　恵利、周藤　清華、高橋　香菜、中嶋美の里、本間　メイ、三澤　眞梨

岡本太郎記念現代芸術大賞

○特別賞
浅野かおり（大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画研究領域1年）

日本文学館企画出版書籍「憧れ」カバーデザインコンペ

○優秀作品
門馬　洋子（芸術学部 絵画学科 日本画専攻1年）
松岡　里実（芸術学部 絵画学科 洋画専攻1年）

「創るガーデンミュージアム」ウォールアート

○準グランプリ
菅野　智美（短期大学部 造形学科 デザインコース 情報メディア1年）
○審査員長特別賞
蛭田裕紀子（芸術学部 絵画学科日本画専攻3年）
○ゲスト審査員特別賞
田子　育実（短期大学部 造形学科 デザインコース 情報メディア1年）
○都筑区特別賞
川人すずか（短期大学部 造形学科 デザインコー 情報メディア1年）

表彰式で審査委員長の奥村靫正氏（本学デザイン学科教授）と
※上記ウォールアートはJR横浜線「鴨居」駅「ららぽーと横浜」建設予定地に11月下旬まで展示される予定です。

Essay・パリ滞在記　髙木 彩さん（第6回パリ賞受賞者）

パリにある国際芸術都市に毎年受賞者を研究員として派遣する100周年記念大村文子基金による「女子美パリ賞」。第6回受賞者で1年間パリに滞在していた髙木彩さんが現地で感じたことを寄稿してくださいました。

パリ滞在も残すところ一ヶ月余りとなりました。「女子美パリ賞受賞」の通知を頂き大喜びしたあの瞬間から一年余りが経ったとは信じられません。私のパリ賞の志望動機は、①新旧問わずアートの歴史が一望出来ること、②パリ国際芸術都市（以下シテデザール）滞在中は「ちょっと散歩」といった手軽さで、日本で傍らに画集を置いていた作家の「実物」が見られること、③モチーフ（歴史的建築物や人物）が無数にあること、でした。

一年の研修を終えようとしている今、思うことが一つあります。パリという街で価値観の多様性を目の当たりにし、今までのアートに対する「固定観念」等が根底から覆された、と言ったら良いでしょうか。

ここシテデザールでの出会い（セルビアやモンゴル、南アフリカ etc.日本ではあまり交流することの無かった作家との）、またパリ在住の作家のアトリエに足を運んだりしているうち、今まで自分の中にあった「アート及びアーティストはこうあるべき」という枠がどんどん外れてきたようです。ここではまず、外の文化を手放しで受け入れる姿勢があり（反対に自国のものは絶対、といった保守的な部分も感じますが）、その寛容さに驚きました。

地元のギャラリーも本当にバリエーションに富み刺激となる面と、多種多様な物に出会い自分の価値観をしっかりと持っていないと、自分を見失いそうになる不安もありました。

シテデザールでは女子美のアトリエのように「一年間の長期滞在」といったケースは稀なようで、他国のアーティストは2～3ケ月で帰ってしまう方が多いです。滞在が短い分パリに来た印象をそのまま作品に転化し、ギャラリーで展示をする方もいます。（先日のパリ郊外の暴動事件を作品にしている作家もいました。）

地元のアトリエで実際にモデルを描いたり、パリを拠点にベネチアビエンナーレやアルルの写真展を見に行ったり・・数えきれない程の貴重な体験ができた一年でした。

日本からかけ離れたこの地に身を置いて、また違う視点で宗教や文化について考えさせられ、「私の中で変化した何か」を今作品に収めたいと思っています。3日後に迫ったシテデザールでの個展に向けて・・。最後にこの貴重な機会を与えてくださった女子美関係者の皆様方に心より感謝を申しあげます。

2002年 女子美術大学大学院美術研究科
修士課程美術専攻洋画領域修了
2005年 女子美パリ賞受賞
パリ国際芸術都市滞在

NEWS・3　100周年記念大村文子基金　平成17年度　女子美美術奨励賞

女子美美術奨励賞（付属高校・中学校生対象）は、本学付属校生徒の美術活動を奨励する賞です。右の通り、本年度の「付属生対象」の受賞者が決定しました。

中井　美帆
付属高等学校
3年梅組在学中

三善　千裕
付属中学校
3年梅組在学中

〈100周年記念大村文子基金とは〉

100周年記念事業の一環として、大村智名誉理事長夫妻からの寄付を基に文子令夫人のお名前を冠して平成11年に設立された基金で、卒業生、在学生の制作・研究活動及び美術活動の奨励を主な目的とした褒賞事業を行っています。このうち「女子美パリ賞」および「女子美 制作・研究奨励賞」は、下記の対象者から公募のうえ選考して授賞します。

【女子美パリ賞】

パリ国際芸術都市のアトリエに受賞者を研究員として派遣し、未来への可能性を期待できる国際的なアーティスト、研究者の育成を図ることを目的としています。

●平成19年度（第8回）募集について
応募期間：平成18年6月1日㈭～
6月30日㈮消印有効
選考方法：第1次：書類審査 第2次：面接
派遣期間：平成19年4月～平成20年3月
（原則として）

【女子美 制作・研究奨励賞】

卒業生の業績顕彰及び制作・研究活動奨励のための賞です。

●平成18年度（第6回）募集について
応募期間：平成18年6月1日㈭～
6月30日㈮消印有効
選考方法：第1次：書類審査
第2次：面接（予定）
※第2次選考は実施されない場合もあります。

お問い合わせ先　企画部企画課
「女子美パリ賞」「女子美 制作・研究奨励賞」係
TEL：03-5340-4556（直通）
FAX：03-5340-4545
E-mail：plan@joshibi.ac.jp

	対象	人数	副賞
女子美パリ賞	大学院（含在学生）・大学・短大卒業生	1名	100万
女子美 制作･研究奨励賞	大学院・大学・短大卒業生（除在学生）	3名	各20万

NEWS・4 産学協同プロジェクト：アトリエ付きマンションが完成

本学デザイン学科 EDコースの飯村和道教授ゼミの4年生が相模原市当麻にある倉庫のコンバージョン（用途転換のためのリフォーム）に協力し、美大生向けのアトリエ付き賃貸マンションが完成しました。女子美の学生たちは施工業社である小山建設株式会社に調査の面で協力し、結果的に18帖の絵画系アトリエと30帖のデザイン系アトリエの付いた、様々な面で美大生の意見を反映させたマンションが完成しました。洗面カウンターのボールも工芸学科の学生がひとつづつデザインして焼いたものが使用されています。

NEWS・5 アジア学生アニメコラボレーション

文化庁メディア芸術祭の同時開催イベントの一環である「アジア学生アニメコラボレーション」。アジアと日本の参加学生全員で一本のアニメーション作品を制作するワークショップです。3月1日に東京都写真美術館において完成した作品を上映する発表会が開催されました。ワークショップには京都精華大学、岐阜県立国際情報芸術アカデミー（IAMAS）、女子美術大学、多摩美術大学、東京芸術大学、東京工芸大学、東京造形大学、武蔵野美術大学より13名が参加し、本学からは芸術学部メディアアート学科の3年生2名、ベトナムからの留学生リュウ・ティ・タン・チャウさんと、今井絵美さんが参加しました。今年はアジアの学生同士の交流に重きを置き、「出会い」が作品制作のテーマになりました。学生たちは短い制作期間の中で各自が描いたキャラクターをコマ撮りし、簡易編集することによって作品化していきました。各自のキャラクターを順番に繋いで一つのアニメーションを完成させるのです。他者のキャラクターやコンセプトを理解し、自分のコンセプトとどう融合させるか、大学や国を越えて内容の濃い意見交換やコミュニケーションがなされたのではないでしょうか。一つのキャラクターが次のキャラクターへと出会い引き継がれていく。最後のキャラクターが最初のキャラクターと出会い繋がり、輪廻のごとく環となりアジアが一つになる…そんな完成したばかりのアニメーションを発表会で初めてみた学生たちは眠そうな中にも達成感がみなぎっていました。

（広報課　内藤 幸江）

【制作スケジュール】

2/13	オリエンテーション、グループ分け、参加学生の作品上映会
2/20	課題提出／講師チェック グループ内意見交換
2/27～3/1	作品制作
3/1	作品発表会

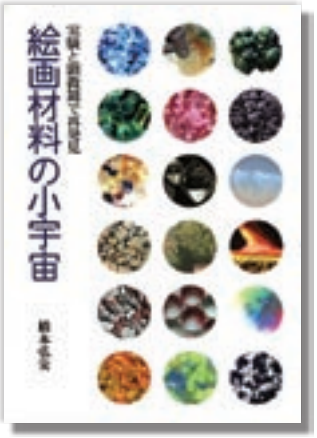
NEWS・6 著書紹介

「注染　手拭いづくし」

大澤美樹子著　バナナブックス

芸術学部工芸学科の大澤美樹子教授が執筆した「注染」技法の手拭いを紹介する本です。多彩な手拭いの呼び名やデザイン、由来が写真と文章で紹介されており、見事な意匠をたっぷりと楽しめます。ちなみに大学で「注染」を学べるのは本学だけです。

「実験と顕微鏡で再発見 絵画材料の小宇宙」



橋本弘安著　生活の友社

本学芸術学部絵画学科日本画専攻の橋本信（弘安）教授が「美術の窓」に4年余隔月で連載した記事が単行本となりました。20数年来の教育研究をまとめ、実験と顕微鏡などで観察・分析した日本画顔料、天然顔料、材料素材の小宇宙がおよそ1600点のカラー図版で紹介されています。

Topics ④ 役職者紹介～新入生のみなさんへ～

理事長・学長　**立石　雅夫**

皆さん、ご入学おめでとうございます。

創造することを愛し、あえて「造形活動」といういばらの道を勇気をもって選ばれた皆さん、女子美へようこそ！

一世紀以上も前に芸術を学びたいと願った女性たちに門戸を開いて以来、数多くの素晴らしい先達を輩出してきた本学の歴史の流れの中に、皆さんは今います。

まず、皆さんを駆り立ててきた「表現することが好き」だという気持ちを、流行や権威に流されることなく、いつまでも保ち続けてください。芸術は偏差値や優劣によって測られるものではありません。自分の表現する力を最後まで信じてください。

とはいえ、芸術表現は、自分らしくありさえすればいいというものでもありません。大学という学びの場では、時間軸（歴史）、空間軸（風土・社会）に視野を広げ、自分の表現をあらためて捉え返して行くことも望みます。自分の表現がどのような意味をもっているのか、より大きな文脈の中に自分の表現を置くことのできる知性を磨いてほしいと思います。

この点で皆さんは、先輩から叱責されることも、励まされることもあるはずです。このことを恐れないでください。打たれ強く、粘り強くあってください。他者の視点を受け容れてこそ開かれる自分、はじめて見えてくる表現の地平というものを、ぜひつかみ取っていただきたいと思います。

同じような道を選んだ仲間たちと励ましあい、研鑽しあいながら、どうか、伸びやかに、未知の分野にも恐れることなく挑戦し、有意義に学生生活を過ごしてください。本学で皆さんが身につけた表現の力と知性は、今後皆さんがどのような生き方を選ぶとしても、一生の友となり皆さんを支えてくれることでしょう。本学はそんな皆さんを精一杯後押ししたいと願っています。

美術研究科長　**広瀬きよみ**

芸術学部長　**加藤　　修**

短期大学部長　**佐藤　善一**

Topics ⑤ モンキーパンチ氏講演会

毎年恒例の学友会主催アートゼミを1月に開催し、『ルパン三世』の作者であるモンキーパンチ氏をお招きしました。

モンキーパンチ氏はとても気さくな方で、編集者との裏話や初期の頃のルパン、外国人漫画家によるルパン、他の漫画家アニメ版ルパンの映像紹介、さらには実際に描かれたそれぞれのキャラクターが出来上がるまでの過程など、普段の大学の講義では聞くことができない漫画家ならではの講演にわくわくし、「ルパンの作者」という実感が沸いて楽しく聞くことができました。中でも日本の漫画を世界に認めてもらうために、今から約20年程前にモンキーパンチ氏他著名な漫画家が何度も渡米し世界に宣伝したという経緯はとても印象的でした。

4401番教室は満席、しかも時間を大幅に超過し、モンキーパンチ氏の漫画に対する情熱が伝わる内容の濃い素晴らしい講演会になりました。（学友会執行部）

ルパンのキャラクターが勢ぞろい

色紙にサインをしてくださったモンキーパンチ氏

Topics ⑥ 平成17年度　マデイラ賞受賞者紹介

短期大学部　科目履修刺繍コース修了生
武 市　成 子

〔作者コメント〕
海は生命を生み育んだところです、いわば我々の故郷です。地球上で我々人間が出現するずっと以前、38億年前から変わらぬ姿で存在しています。また寄せては返す波も休むことなく繰り返され、恒久の姿を見ることができます。波の作り出す形や色は同一のことはなく常に変化しています。私たちの力の及ばない自然の力を海の波をもって表したいと思い、質感を糸の太さ・繍法・色で変化させ、光や風を箔や色と形で表してみました。

『白亜紀』　600×1500mm
素材：絹布・絹糸・金糸・綿糸・金箔

※マデイラ賞について
ドイツのマデイラ社は工業用、作家・一般向けの刺繍用糸の製造・販売を行っています。アメリカ・イギリス・日本などに支社があり、業務のほかに刺繍やテキスタイル、ファッションを学ぶ学生たちをサポートすることも重視し、毎年イギリスで開催されるマデイラ・ショーは、展示部門に大学や専門学校の学生作品を招待展示しています。2000年のマデイラ・ショーには刺繍コースの学生作品が展示され好評でした。マデイラ賞は、女子美術大学短期大学部造形学科デザインコースクラフトデザイン系刺繍の卒業制作および修了制作において優秀な作品を制作した学生に授与されます。また、副賞としてマシーン用刺繍糸と用具のセットが授与されます。

Series シリーズ 女子美探訪③ 「街へ」

私は写真家ですが、写真でご飯を食べている訳ではないので、趣味に毛が生えた程度と周囲には思われがちです。かえって気安く、知人のミュージシャンからジャケット写真を依頼されたり、自分たちの経営する店で目玉商品の電飾看板を任されたりします。確かに、泡の見事な生ビールはプロに頼めば100万円。たった1回、シャッター押すだけで。だったら君が押してみて、と。

でも、やってみないとわからないことってありますね。100万は決して法外な値段ではなかった。1回のシャッターを押すまでに要する膨大な手間と時間、費用を考えると。大判カメラや照明を使うこと自体、特殊技術です。私のようなスナップ写真家が、大判で商品撮影するのは、自転車しか乗らない人がいきなり大型トラックを運転するようなもの。

とにかく引き受けたからには、ご要望にお応えします。ただ、出来上がりには苦労の跡が残りませんから、案外、有り難みはないかも。やはり、相場の金額で貰わないと損するだけかと思ったりもしました。

だからという訳ではありませんが、頼まれてやるということを写真ではしたくないんですね。本当は。だって、街が私を呼んでるんですもの。写真って、どう撮っても、思いがけないものが写ったり、時が経てば記録として思いがけない価値を持ったりします。だけれどそれは全体を捉えきることなど出来ず、一瞬の光と影を掬い取るに過ぎないということです。いっそ空っぽになって、街に誘われるまま撮るしかない。誰のためになるのか、何の役に立つのかもわからない。その当てのなさが、私には救いです。

このコラムのお話を頂いた時も、正直悩みました。が、女子美も、街の一部と思ったら、自然と足が向いたのです。

迫川尚子（さこかわ　なおこ）［写真家］
鹿児島県種子島生まれ
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業

訂正（お詫び）
前号153号におきまして、記載に誤りがございました。ここに訂正いたしますとともに深くお詫び申し上げます。
P.6「石の絵具制作キット発売」
東京サイエンス電話番号（誤）03-3350-6745
（正）03-3350-6725

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料でお送りしております。
ご希望される場合は、お送り先を広報課まで連絡いただきますようお願い申し上げます。

発　　行　学校法人　女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8
企画・編集　企画部 広報課
監　　修　原田　松野
発 行 日　2006年4月1日
URL http://www.joshibi.ac.jp